

農林水産研究高度化事業プロジェクト課題
「広葉樹林化のための更新予測および誘導技術の開発」
平成20年度公開講演会

広葉樹林化への道 ～天然更新を考える～

2009年2月27日

砂防会館

森林総合研究所
田内裕之

はじめに

- 日本の森林は、林齢が50年生以上の人工林の割合が急増しています。
- 社会からは、国土保全、水源のかん養、温暖化防止、生物多様性の保全など森林の持つ公益的機能のさらなる発揮が期待されています。
- 国の施策でも、主に手入れ不足になっている人工林を対象に、広葉樹林化や長伐期化等の多様な森林への整備の推進が掲げられました。
- また、森林整備に関する税（森林環境税等）の導入により、地域住民からは、広葉樹林化などによる森林の公益的機能の向上が期待されています。

研究プロジェクトの紹介

- 本研究プロジェクト「広葉樹林化のための更新予測および誘導技術の開発」は、農林水産省の農林水産研究高度化事業として平成19年度から始まりました。
- その目的は、森林生態系や樹木の持つ機能や能力を活用して、針葉樹人工林を広葉樹林へと誘導(更新)する技術の開発を行うものです。
- そこでは、以下の開発研究を行っています
 - (1) 的確な誘導を行うため、適地の判定や更新の可能性を判断する基準づくり
 - (2) 誘導のための効果的な施業方法
 - (3) 誘導化が達成されたかを将来にわたって検証するための方法

シンポジウムの紹介

- 本シンポジウムでは、森林を伐採した後に天然更新が可能であるかどうかの判定基準作りに関係する、上述の(1)についての研究成果を紹介します。
- 講演は、過去の土地利用から天然更新適地を判断する手法や更新の可能性が高い森林の特徴についての報告の外、実際に現場で使えるような更新完了の基準を作る際の苦労話や、天然更新作業が行われた後40年の追跡を行った実例報告などを行います。
- その後のフリーディスカッションでは「天然更新はどこまで期待できるのか」を主題として、参加者の皆様からの質問や意見も交え討論を行います。